

激愛マリッジ

プロローグ

「結婚しよう。愛衣^{あい}」

それは、夢のような言葉だった。

夜とは思えないほどキラキラと明るいイルミネーション。

タイミングよく降り始めた雪が、その光景をいつそうロマンチックに盛り上げる。

今日はクリスマス・イブだ。そして、わたし——向井愛衣^{むかい}の二十歳の誕生日でもある。

こんな日に、まさかずっと好きだった憧れの幼なじみ、雅貴^{みやたか}さんからプロポーズされるなんて！

十歳年上の彼は、父親同士が昔なじみということもあり、子どものころからよくうちに出入りしていた。その関係で、雅貴^{みやたか}さんはずっとわたしの家庭教師をしてくれたのだ。

年の差はあるけれど仲の良い幼なじみ——

大人で優しい憧れの人が好きな人になるのは、わたしにとって自然な流れだった。

雅貴^{みやたか}さんから見れば、わたしは本当に子どもだと思っ。

彼は大人で素敵すぎて、隣に並んでもせいぜい兄妹にしか見えないだろう。

それでも彼は、いつもわたしに優しく接してくれた。考え方や言動を、子どもだと馬鹿にされたこともない。彼の思いやりに溢れた大人の対応が嬉しくて、尊敬さえしていた。

そんな彼と二十歳の誕生日と一緒に祝う約束をしたのは一ヶ月前。

この日を、どれだけ待っていたことか！

父が誕生日プレゼントに買ってくれたワンピースを身にまとい、普段あまりしないお化粧も、メイクの上手な友だちに聞いて頑張った。

準備は万端……かは少々疑わしいけど、それでも雅貴さんとの誕生日ディナーだもん、準備には気合が入る。

キャンドルの灯がロマンチックな高級レストランに連れて行ってもらい、ちょっと大人なディナーを楽しんだあと、イルミネーションを見に駅前公園通りにやってきた。

クリスマス・イブだし、イルミネーション目当ての人がいっぱいいるだろうと思っていたら、通りにはなぜかわたしたち以外に人がいない。

どうしてかなく、なんて考えつつ雅貴さんに視線を向けると……

——信じられないプロポーズの言葉である。

煌めくイルミネーションをバックに立つ雅貴さんは、いつにも増してとても素敵だ。

百八センチを超える長身に、すっと通った鼻梁と切れ長の双眸。眉目秀麗とは、彼のためにある言葉だと思う。

スーツにキャメルのコートを羽織った立ち姿は凛々しくて、見惚れずにはいられない。

そんな彼からじっと見つめられ、わたしの胸はドキドキと早鐘を打ち始める。

幸せすぎて涙が出そう。……というか、あまりのことに眩暈がして倒れそうだ！

驚きで言葉もないわたしに微笑み、雅貴さんは軽く右手の指をパチンと鳴らす。次の瞬間、まるで示し合わせたように大きな打ち上げ花火が夜空を彩った。

「わああっ！ なにっ!？」

思わず歓喜の声を上げてしまった。だって、まさか冬に花火が上がるとは思わない。びっくりしたのもあるけれど、すごく綺麗……

わたしは口を開けたまま、次々と上がる花やハートの形をした花火に見入った。

「ま、ま……雅貴さんっ、すごいですねえっ、綺麗っ!」

イルミネーションの煌めきと花火の光、どちらも同じくらいキラキラしている。テンションが上がって、つい雅貴さんのコートを掴んでいくいと引っ張ってしまった。

そのとき、くすりと笑う声が聞こえてハツとする。ちよつと、わたしハシャギすぎでしょう!!

「愛衣……これを」

雅貴さんがわたしの目の前になにかを差し出す。親指と人差し指でつまんだ小さなもの。

……指輪……?」

「え? ……えっ?」

わたしは言葉もなく、指輪と雅貴さんを交互に見た。

慌てるわたしと対照的に、彼は余裕の笑みを浮かべている。その表情を見ると、なんだか自分が慌てすぎているような気がして、恥ずかしくなった。

彼はわたしの左手を取り、薬指にそっと指輪をはめる。サイズなんて聞かれたこともないのに、その指輪はわたしの指にぴったりとはまった。

キラキラした綺麗な宝石のついた指輪だ。見るからに高級そうで、まだ二十歳のわたしははめていてもいいのか迷うレベル。思わず目の前の雅貴さんを見上げてしまう。

その答えをくれるかのように、雅貴さんはわたしの薬指にはめた指輪の上に唇を落とす。

「俺と結婚して、愛衣」

ひゃあああつ……

心が悲鳴……いや、なんて言ったらいいかわからない歓声を上げている。

嬉しいような、焦るような、恥ずかしいような。

とにかくわたしは、言葉もなくただ口をばくばくさせてしまう。

指から唇を離れた雅貴さんは、手を握ったままわたしを見つめる。

凛々しくて綺麗な雅貴さんの目。今夜はそこに、見ているほうが恥ずかしくなるくらいの色気を感じた。

「返事は、Yesしかないと思っただい？」

「え……あの……」

なんだか頭がポツツとしてきた。ディナーでほんの少し飲ませてもらったワインのアルコールが今ごろになって回ってきたんだろうか。

確かに酔ってる。でもそれは……いつもと違う雅貴さんと、このムードにだろう。

気づけばわたしは、こくりとうなずいていた。

頬が熱くて堪らない。

「真っ赤だ。かわいいよ」

くすりと笑う雅貴さんに、指で頬をつつかれる。

そ、そんなことされたら、よけいに赤くなっちゃうじゃないですか！

「……長年、待った甲斐があった。これで、愛衣は俺のものだ」

そう言った唇が、わたしの唇に触れる。

——もう……脳が溶けちゃいそう……

ロマンチックな景色とムード。そして、大人の色気が漂う雅貴さんの雰囲気と言葉に蕩かされる。

そうしてわたしの二十歳の誕生日は、一生忘れられないものになった。

第一章 婚約した、みたいです。

まだ夢を見ているみたいだ。

翌朝、洗面所の鏡に映る、なんともいえないぼんやりした自分の顔を見つめる。

寝起きは悪いほうじゃないのに、こんなに頭がボーッとしているだなんて、熱でもない限り考えられない。

洗面台に手をつけて身を乗り出す。決して高くない鼻が鏡にくつつきそうなほど顔を近づけ、自分の顔をまじまじと見つめた。

「あれは夢……だったのかなあ……」

呟いて、こつんと鏡にひたいをくつつけた。

——結婚しよう。愛衣。

昨夜、憧れの人から言われた言葉が頭を駆け巡る。

煌めくイルミネーションに、舞い散る白い雪。冬の透きとおった夜空に咲き乱れる色とりどりの花火と、見たこともないくらい豪華な指輪。

あんなゴージャスな指輪、そんなじよそこのアクセサリーショップでは絶対にお目にかかれない

よ。そんな指輪をわたしの指にはめて、そこにくちづけてきた雅貴さんの姿が頭から離れない。

彼に言われた言葉や、わたしに向けられた微笑み——それらを思い出すだけで、まるで発熱したみたいに全身が熱くなるのだ。

——結婚しよう。愛衣。

何度も頭の中で繰り返される言葉に夢心地になるものの、そうはさせるかと現実がストップをかけてくる。だって、彼——西園寺雅貴さんは、わたしとは住む世界が違う人。ずっと家庭教師をしてきていた仲の良い幼なじみだけど、ラリーウガーデンズホテルチェーンの社長であり、それらを統括する西園寺ホールディングスの跡取りなのだ。

そんなすごい人が、平平凡凡な一介の女子大生にプロポーズなんてするだろうか。

いくらずっと憧れていた好きな人の言葉でも、さすがに夢ではないかと疑ってしまう。

「……雅貴さん……」

「なんだ？ 愛衣」

ポツリとこぼれた呟きに返事があつた。

「まだパジャマだったのか。今日は寝坊助だな、もう昼だぞ？ もしかして眠れなかったのか？」

幻聴にしては、やけにリアルに聞こえる。凜々しさの中に優しさが漂う雅貴さんの声そのものだ。

「まあいい……おはよう、愛衣」

直後、チュツと音を立てて頬にキスをされた。その瞬間、わたしはズサツと洗面台の横の壁に背

中を張りつける。

「えっ……えっ……、ええっ!？」

驚きのあまり、口から出てくるのは言葉にならない声ばかり。

そんなわたしの目の前には、ピシッとスーツを着こなした雅貴さん。

堂々とした風貌に、高そうなデザインスーツがとてもマッチしている。スーツは着る人によっても変わるものなのか、と思わずにはいられない。申し訳ないが、日常的にその辺で見るスーツ姿の方々とは雲泥の差だ。

非常に整った彼の容姿と相まって、目を奪われるほどカッコいい。

「目が覚めたか？」

雅貴さんはこりと余裕の笑みを浮かべている。

「ま……ま、雅貴さ……」

「ん？」

上手く言葉が出ないわたしに一步近づき、雅貴さんは優しげに目を細める。

彼の醸し出す雰囲気めっちゃ甘くて、なんだかいたたまれない。

すると彼は百八センチを超える長身を少しかがめて、半開きになっているわたしの唇に人差し指で触れた。

「愛衣が鏡と仲良くしていなかったら、こっちに挨拶したんだけどな」

ポンッ！ と、頭の中でポップコーンが弾けたような音がして、顔どころか耳まで熱くなった。

こ、これは……、唇にキスをしたかったってこと……!？」

「なっ……なにを言ってるんですか。そういうことを言って、からかっちゃ駄目ですよっ」

なんとか笑って受け流そうとするけれど、笑顔が引き攣ってしまふ。そんなわたしに、雅貴さんは夢のような現実をポーンと突きつけてきた。

「婚約者なんだから、唇にキスくらいいいだろう?」

わたしは笑顔を引き攣らせたまま固まってしまふ。

—— こん や く しゃ ……

それって……、つまり……

「あの、雅貴……さん?」

「なんだ? 愛衣」

おそろおそろ呼びかけるわたしに、雅貴さんの声は穏やかだ。いつもどおり落ち着いていて、でも普段とはちょっと違う視線でわたしを見ている。

「あの……昨日、は……」

「ああ、昨日は愛衣の誕生日と一緒に祝えて嬉しかった。あのレストランは気に入ったか? 近いうち、また行こうか」

「え……あの……、でも、高そうなお店だったし、そんな、近いうちなんて……」

「婚約者に遠慮なんてするな。もつと我儘わがままを言ったっていいんだぞ」

「それなんですけどお!!」

すかさず雅貴さんの言葉に食いつく。彼があまりにも平然と話しているので、なんだか冷や汗と同時に動悸までしてきた。

「こ、婚約者って……あのっ……」

なぜわたしが慌てたのか、雅貴さんにはわからないようだ。彼はわたしの左手を取り、自分の右手で包みこむ。

「レストランのことは覚えているのに、肝心なことを覚えていないとは言わないだろうな？」

「肝心な、こと……」

「イルミネーションの中で、プロポーズを受けてくれただろう」

夢じゃなかったああ!!

あまりにも現実離れしていて夢かと思っていたけど、夢じゃなかったんだ。

あのイルミネーションも、舞い散る雪も、色とりどりの花火も、彼からのプロポーズも、現実だったのだ。

大きく目を見開いたわたしを見つめ、雅貴さんはくすりと笑う。そして左手を包んでいた手を、そつと動かした。

「これをしていながら、夢だと思っていたのか？」

目の高さにもで持ち上げられた左手の薬指には、二十歳の小娘には似合わない豪華な指輪がはまっている。

昨夜、雅貴さんがくれた指輪だ。

どうやらわたしは、これをはめたまま眠ってしまったらしい。

いくら昨夜は夢見心地で帰宅したからって、こんな高そうな指輪をはめたまま眠ってしまうなんて。

「昨夜飲ませたワインのせいかな？ アルコールでぼんやりしてしまうかわいいところは、俺以外には見せないでくれよ。いいね？」

「は……はい……」

ぼんやりしていたのは、ワインのせいではない……と思う。

あまりにも信じられない出来事だったから、わたしが夢にしようとしていたのだ。

でも、夢じゃないんだ……。わたしが、雅貴さんと……

混乱しつつも、現実を理解しようとして頭がフル回転し始める。そのせいか眉が寄り、硬い表情になっちゃった。

すると雅貴さんがくすりと笑って、わたしの唇にチュッと軽くキスをする。

「そんな顔をしないでいい。仮に覚えていなかったとしても、怒ったりしないよ」

ひい——!!

に、二回目、二回目ですよ、雅貴さん!!

昨日に続いて、二回目の唇にチューですよ!!

「そもそも愛衣は、俺にプロポーズされて『夢かもしれない』と思うほど舞い上がっていたんだらう? かわいすぎて感動する」

ポ、ポジティブですね、雅貴さんっ!!

そんな、くすぐったくなるような甘い声で言われたら、興奮して倒れちゃいそうです!!

わたしは訳もなく叫んで暴れ出してしまいたいような自分を、必死に抑えた。

一方の雅貴さんは、わたしを蕩けそうな瞳で見つめている。

そうだ。この目だ。

確かに昨夜、この目を見た覚えがある。見つめられるうちに、全身がほんわりして……

——結婚しよう。愛衣。

頭の中で、ボンツと音がする。まるで瞬間湯沸かし器みたいに体温が急上昇して、身体中が熱くなる。

どうしよう。わたし、きつと真っ赤になってる。いつそ湯気でも出して身体から熱を逃がしたいくらいだ。

「思い出したら恥ずかしくなったのか? 真っ赤になって、愛衣は本当にかわいいな」

そして、またしても雅貴さんの唇がわたしの唇に触れて——

もう……脳みそが溶けちゃいそう……

彼はわたしの手を握ったまま、もう片方の手で頭をボンボンと撫でる。

「このまま一緒にいたいところだが、そろそろ会社に戻らなくてはならない時間だ。夜にでもまた連絡するよ」

そこでハッと気づく。そうだ、雅貴さんはどうしてここにいるんだろう。

時刻はもうお昼に近い。

今日は十二月二十五日。平日だから、会社が休みということはない。

わたしは大学が休みに入っているけど、彼は仕事があるはずだ。

「雅貴さんは、ここでなにを?」

「なについて、愛衣の顔を見ながら手を握っている。とてもいい気分だ」

……照れます……

「い、いや、そうじゃなくてですね、こんな時間にここでなにをしているんですか、っていう意味ですよ。お仕事はどうしたんですか?」

「ああ、仕事の合間に結納品を届けに来たんだ。大至急用意させていたものが、ようやく揃ったんでな」

「そうなんです。結納品……ん……」

雅貴さんがあまりにも平然と言うものだから、わたしもすると流しそうになる。しかし、平然

としたままではいられないお届け物だ。

……結納品って!?

「もちろん、両家の結納の会食の場はきちんとセッティングするつもりだ。ただその日まで待つていられなくてな。早く渡しておけば、愛衣は俺と結婚するんだって実感も湧くだろう?」

これまで雅貴さんには、なんでも堅実に進めていく真面目な人、というイメージがあった。なのに、待ちきれずに結納品だけ先に持つてくるなんて、いつもの落ち着いた彼らしくない。

でも、このらしくない行動が、わたしを思うが故なのだと思えば、なんだかくすぐったくなる。

「ちょっと性急だったかな? こんなんじや愛衣に笑われてしまうな」

自分でもらしくないと感じたのだろう。雅貴さんがちょっと照れくさそうに笑う。そのほにかんだ微笑みに胸を撃ち抜かれた。たちまち、彼への愛しさがぶわつと溢れ出してくる。

雅貴さんは、本当にわたしと結婚したいと思ってくれている。

信じられないけど、これは現実なんだ。それも、とんでもなく幸せな。

雅貴さんから熱っぽい眼差しで見つめられ、気持ちがほわつとしてくる。そのまま彼を見つめ返していると、キュツと手を握られ彼の顔が近づいてきた。

——直後、その甘い雰囲気を持ち破るスマホの着信音が響き渡る。

びっくりしたわたしは、慌てて雅貴さんから離れた。

数回のコールで切れた着信に一瞬眉をひそめた雅貴さんは、軽く舌打ちをしてわたしの手を離す。

「すぐに切れちゃいましたけど、出なくてよかったですか?」

仕事だったらまずいのではないか……そう思って声をかけた。しかし彼は、なにかを思案するようになにをわたしを見る。

「秘書に、次の予定に影響が出そうならスリーコールだけ鳴らせと言ってあったんだ」

ああ、だから短いコールで切れたのか!

「残念だけど時間切れだ。仕事に戻るよ。愛衣もちゃんと顔を洗って、目を覚ますように」

「は、はい、すみません」

顔を洗う前に、これ以上ないつてくらい目が覚めました。

「結納品と一緒に、ウエディングドレスのカタログもお義母さんに預けてある。ラリーユージャーデンズホテルのウエディングサロンが誇る、オリジナルブランドだ。『こんな感じのがいい』というデザインがあったらすぐに教えてくれ。それをベースに、愛衣だけの完全オリジナルドレスを作らせようと思っっているんだ」

「ウエディングドレス……ですか?」

「カレードレスのカタログもあるから、気に入ったものはすべて教えてほしい。何着でも作らせよう」

「そっ、そんなっ、何着もなんて着替えてるだけで結婚式が終わっちゃいますよ」

わたしが慌ててそう言うと、雅貴さんは楽しげに笑う。

「俺が着せたいと思っっているんだよ。綺麗なドレスを着た愛衣を、たくさん見たいんだ」
さつきから胸のドキドキが大きくなる一方だ。

雅貴さんはわたしの頭をポンポンと撫でてから、軽く手を上げて洗面所を出ていく。そんな彼の背中を見送るわたしは、なんとも言えない顔をしていたに違いない。

嬉しくて笑いたいの、照れくさくて笑うのを我慢したら、変に頬が引き曇ってしまった。

彼からウエディングドレス姿が見たいと言われて、恥ずかしいような嬉しいような、すごく幸せな気分になる。同時に胸がギュッと締めつけられて、涙が出そうになった。

自分でも、笑いたいのか泣きたいのか、よくわからない。

わたしは本当に、雅貴さんの「婚約者」になったの？

彼は、いつもは「陽子さん」と呼んでいるわたしの母を、「お義母さん」と呼んでいた。

結婚式もなにも決まっていないのに、ウエディングドレスを選んでおけと言っていたし。

あの雅貴さんがわたしの結婚を楽しみにしてくれている。

そう思ったとたん、胸がきゅんっとした。よく聞く「きゅん死しそう」っていうのは、こういう状態のことじゃないだろうか。

洗面所の出入口に目を向けたまま、わたしはそこから視線を動かせない。

クールでカッコよくて……どうしてこんな素敵な人がずっと、わたしの家庭教師を続けてくれていたのか不思議だった。

だけど、わたしが彼を好きだったように、彼も同じ気持ちでいてくれたのだとしたら……

どうしよう……すごく幸せ……！

「愛衣ー、まだ顔洗ってるの？」

洗面所の入り口から、母が顔を出した。そして、ぼんやりしているわたしの様子を見て、首をかしげる。

「どうしたの？　なんか、コンビニのクジを三回引いて全部当たっちゃった、信じられなく、みたいなの顔して」

……なにその微妙なたとえ。ああ……そういえばお母さん、このあいだ、三回引いて全部外れたって言ってたっけ。

「坊ちゃんにプロポーズされたんでしょ？　コンビニのクジよりすごいものが当たったじゃない」

「ま、雅貴さんとコンビニのクジを一緒にしないでっ！」

ついムキになると、笑いながらそばにきた母に、寝癖のついた髪を撫でられた。

母は雅貴さんのことを「坊ちゃん」と呼ぶ。というのも、わたしの父が総支配人として勤めるホテルが、ラリュールガーデンズホテルチェーンの一つだからだ。おそらく、「坊ちゃん」呼びはそこからきているのだと思う。とはいえ、大人になってまで「坊ちゃん」はどうなんだろう。

雅貴さん自身は、特に気にしている様子はないけれど……

「坊ちゃんが持ってきた結納品、すつごく立派だったよ。仏間に置いてあるから、見ておいで」
「う……うん」

「カタログがいっぱい入った紙袋も預かってるわよ。坊ちゃんが、見ておいてくれって。あれってウエディングドレスのカタログでしょう？ お母さんも一緒に見ていい？」

「それは、もちろんいいけど」

「リ्यूーガーデンスホテルのウエディングサロンって、豪華で有名だし。坊ちゃんが選んでくれたカタログなら、見るのが楽しみねえ」

少女みたいにキラキラと目を輝かせる母に、わたしのテンションも上がってくる。

「そうだね」

「ああそれと、ちゃんと顔を洗って着替えてから仏間に行くんだよ。きちんと身なりを整えてからじゃないと、バチが当たりそうなほど立派な結納品だからさ」

「そんな大袈裟なあ」

国宝かつ、と内心で突っ込みを入れつつ笑うと、母の表情がふつといたわるようなもの変わった。不思議に思っただけ首をかしげるわたしに、母が少し声のトーンを落として口を開く。

「よかったわ。思ったよりも落ち着いているみたいで。びっくりして、もつとオロオロしてるんじゃないかと心配したけど」

「し、しないよ……。だって、いやなことじゃないし……」

「そうね、愛衣は昔から坊ちゃんのことを大好きだもんね」

「え!？」

いきなりそんな核心をついてきますか!？」

お母さんに雅貴さんへの気持ちを言ったことはなかったけど、娘の恋心なんてとくにお見とおし、つてやつだろうか。

頬がぼわんと温かくなった気がする。照れているわたしを見てクスッと笑った母は、軽く頭をポンポンと撫でてからそばを離れた。

「坊ちゃんも長いこと待ったしね。今ごろ本人は大喜びだろうけど、愛衣も嬉しそうでよかった。

でも……まさか本気だったとはね……」

そんなことを言いながら、母は洗面所を出ていく。

去り際の母の言葉に、なんとなく聞き覚えがあった。

そういえば雅貴さんも昨日、「長年待った」と言っていなかっただろうか？ あのとときは、それぞれどころじゃなかったし、彼が大袈裟に言っているだけだろうと考えていたのだけ……

まさかとは思うけど、この結婚は生まれたときから決まっていたとか、そういうやつ？

そう思ったら、なんだかいる気になってしまふ。

この疑問は、誰に聞いたらわかるだろう。雅貴さん？ いや、もしこの結婚が親同士の繋がりがから始まっているのなら、父に聞くのがいいのかもしれない。

「雅貴さんのお父さんとも仲が良いし、お父さんなら事情を知ってるはずだよね」
ちよつど今日は家にいるはずだから、あとで聞いてみようかな。

毎年、十二月二十四日か二十五日のどちらか一日、家族でクリスマスとわたしの誕生日を兼ねたお祝いをしているのだ。

今年は二十四日に雅貴さんとの約束があつたこともあり、家族でするお祝いは二十五日になった。これまで父は、お祝いの日の夕食に間に合うよう早めに帰ってきてくれていたが、今年は記念すべき二十歳の誕生日。いつも忙しい父がすっかり休日の申請をして、休みを取ってくれたのである。『本当にあなたは、愛衣に甘いんだから』

母が苦笑いしながら言う言葉は、我が家のお決まりのセリフと言つてもいい。

これは一人娘の特権とでも言うべきか。

でも、もう二十歳になつたんだし、こういうのも卒業しなくちゃダメかな。

そんなことを考えながら、わたしは急いで顔を洗い身支度を整えた。ご飯を食べに行く前に、母から父のいる場所を聞き仏間へ向かう。

近くまで行くと、仏間の襖は開いていた。

「お父さん」

ちよつとおどけて襖から室内を覗きこみ、わたしは息を呑んだ。

六畳ほどある仏間には、結納品と思しきものが所狭しと並べられている。

積み上がった反物たんものに立派な桐箱、房ふさの付いた紐ひもでくくられた漆塗りうるしぬりの入れ物。そして豪華な水引みずひきのついた品物の数々。

でも、わたしが息を呑んだのは、予想を超える結納品にすくんでしまったからだけではない。

結納品の前で正座をする、父の寂しそうな背中を見てしまったからだ……

「愛衣？」

父が振り返る。わたしが来たからなのか、丸まっていた背筋がピンツと伸びた。

「お……お父さん……、あの……」

言葉に詰まる。どうしよう、父は普通にしているつもりなのかもしれないが、漂ただよう雰囲気ふんいきがしんみりしている。

「どうした？ 結納品を見に来たんじゃないのか？」

「う、うん……すごいっぱいだね……」

「そうだな……」

息と一緒に言葉を吐き、父は結納品へ視線を向ける。そのどこか寂しそうな横顔から、わたしは目をそらした。

とても話し続けられる雰囲気ではない。

わたしは、そつと、仏間の前から離れた。

—その後、事態は思った以上に急速に進んだ。

夢のようなプロポーズに浸^{ひた}ったり、この結婚の事情について父に確認する余裕はなかった。

あれよあれよと結納や食事が執^と行^{おこな}われ、気づけば結婚式の日取りまで決まってしまうていた。なんと、プロポーズから一ヶ月半後のバレンタインデーである。心の準備をしている暇もない。

そもそも、たった一月半かそこらで、結婚式の準備なんてできるものなのだろうか。

だが……

『大丈夫。ウエディングサロンのスタッフが、すべて取り仕切ってくれる。ラリユーガーデンズホテルが誇る精鋭スタッフだから問題ない。愛衣はなにも心配しないでいいんだよ』

と、雅貴さんはそれはそれは麗^{うつく}しい微笑みを浮かべて、わたしに言ったのだ。

けれど、結婚の準備が大変だつてことは、ちよつと調べればわかる。

きつと大学のテスト勉強も手につかないくらい忙しくなるに違いない。そう覚悟していたわたしに課せられた“準備”は、ウエディングドレスのデザインをリクエストすること、披露^{ひろうえん}宴に呼びたい相手を選ぶことだけだった。

それ以外の準備は、雅貴さんの手配してくれたサロンスタッフが全部やってくれるというのだ。

そんなこんなで、なんだかよくわからないまま、誕生日から大晦^{おおみそか}日までの一週間は、まるで一年を早送りしたかと思うくらい目まぐるしく過ぎていったのである。

そして、結婚式の前には、年明け一番の大きな行事になるはずだった成人式も待っている。大学

の友だちはもちろんだが、進学などでバラバラになっていた高校の同級生にも会える機会とあつて、ちよつと楽しみにしていた。

友人たちには、そのときに結婚について伝えたほうがいいだろうか。いや、成人式は出席するみんなのお祝いの場合のだから、そんな日に伝えて変に気を遣わせることになったら申し訳ない。

だったら、結婚式を挙げたあと、改めて葉書を出したらいいのだろうか。

ハッキリいつてわたしは、まだまだこういう世間の常識のようなものに疎^とい。

悩んだあげく母に相談してみたところ、結婚式のことなら雅貴さんと二人で決めたほうがよいとのことだった。

そこでわたしは、成人式を三日後に控えた夜、仕事帰りに家に寄ってくれた雅貴さんに思い切つて相談してみたのである。

「成人式で結婚報告？ 友だちに？」

そう問い返しながら、雅貴さんは手土産^{てみやげ}に持ってきてくれたケーキの箱をわたしの部屋の机の上に置く。家庭教師をしてくれていたときみたいに、机の横に彼用の椅子を引き寄せて座り、ケーキの箱を開け始めた。

「いいんじゃないか？ 人数の関係で、式に呼べない友だちもいるだろうし」

「んー、そうなんですよね……あ、他にも報告したい人がいる場合は、葉書とかを出せばいいですか？」

「結婚報告の葉書は大量に用意するし、送りたい相手を教えてもらえれば、すべてこちらで手配するから」

「そう……ですか？」

わざわざ書き出さなくても、名簿などで該当者に丸を付けて出してくればいいと言われる。ずいぶんと楽なんだな……。けど、本来は自分でする作業なんだよね。

「ほら、今日のケーキは力作だぞ。新年の和ケーキを愛衣がすごく褒めていたと言ったら、うちの若いパティシエが泣くほど喜んで、張り切って会社まで届けてくれたんだ」

そう言っつて、目の前に出された色とりどりのかわいいプチフル。

宝石みたいに鮮やかなケーキが、仕切りの付いたケースにひとつひとつ並べられている。

しかもこのケースがプラスチックなどではなく、大理石ふうの模様を入れた乳白色のセラミックだつたりするから、高級感が半端ない。

見た目だけで心躍こころおどらずにはいられないはずなのに、考え事をしていたせいで反応が遅れてしまった。

すると、それをおかしく思ったのか、雅貴さんに顔を覗のぞきこまれる。

「どうした？ 愛衣がケーキを見て笑わないなんて、どこか具合でも悪いのか？」

お菓子で釣られる子どもですか、わたしは。

「いえ、なんだか、申し訳ないような気がして」

「申し訳ない？ なにがだ？」

「だって、そういう葉書を出したりするのも、本来なら自分でやることでしょう？ それなのに、全部お任せしちゃって……」

雅貴さんは、プチフルのケースを机に置き、両手でわたしの頭をゆっくりと撫なでる。

なんだか頭部全体を触られているようでおかしな気分。ほわっと、頬が温かくなる。

「愛衣は、遠慮深いな。そんなことは気にしなくていいんだよ。俺たちに代わって準備をしてくれるのが、サロンスタッフの仕事なんだ。彼らは報酬と引き換えに仕事を行おこなっている。もし愛衣が、『申し訳ないから自分でやる』なんて言ったら、そのぶん彼らの報酬が減ってしまうだろう？」

どうだ？ と、優しく諭さとすみたいな雅貴さんの言葉。

「……減るのは……、嬉しくないですよね」

「そうだな。だから、黙って彼らに任せておこう。愛衣は当日の衣装合わせや大学の後期試験の準備で忙しいだろう」

「はい……」

なんとなく言いくるめられてしまった感はあるものの、雅貴さんの言うことにもうなずける。

それに、こうしていろいろ手配してくれているのは、雅貴さんの優しさだと思うから。

わたしは気持ちを切り替えて、綺麗に並んだプチフルの中からリングゴのタルトをつまみ上げ、雅貴さんに笑いかけた。

「ありがとうございます。なんだか自分の結婚式なのに、今も全然実感が湧いてこなくて……親しい友だちで結婚した人なんかまだいないし」

ぱくりとひと口かじると、雅貴さんの手が再びわたしの頭を撫でる。

「出席してくれた友だちが、愛衣を見てすぐ綺麗でよかった、自分もこんな結婚式がしたい、そう言ってくれる式にできたらいいな」

「はい。ちょっと照れちゃいますけどね」

照れ笑いを浮かべながら、わたしは美味しいプチフルをパクパクと食べ進める。

「そういえば、披露宴に呼ぶ人は決まったのか？」

「あー、それが大学のゼミでお世話になってる先生や仲良くしている人も多いから、男女ちよどよく呼ぼうと思うと、それだけで友人席がいっぱいになりそうで……。ずっと悩んでたけど、高校の友だちは諦めようと思って」

プチフルに心を奪われつつ口にすると、頭を撫でる雅貴さんの手がピタッと止まった。

「……式に呼ぶのは、女の子の友だちだけにしてほしい」

「え？」

意外なことを言われてキョトンとするわたしに、雅貴さんは話を続ける。

「お世話になってる先生や男の友人には、後日挨拶の葉書を出せばいい。式に呼ばなくても失礼になるなんてことはないから、心配しなくて大丈夫だよ」

「あの……でも」

「それなら高校のときの、親しかった女の子たちを呼べるだろうか？」

「どうして……式に招待するのは女の子だけなんですか？」

「ああ、実はこちらの招待客が、会社や取引関係の人間が多くて地味なんだよ。愛衣の友人席に若い女の子がいっぱいいたほうが、会場が華やかで明るい雰囲気になっていいんじゃないかと思ったんだ」

理由を知って、ぷつと噴き出してしまった。確かに、会社関係の人が多ければ堅苦しい雰囲気になるだろう。

「それに……」

明るい口調がしっとりとしたものになる。雅貴さんの指先がわたしの頬を撫で、色っぽい眼差しが目の前に近づいた。

「男なんか招待して、花嫁を奪われたら大変だろうか？」

チュッと、彼の唇がおでこに触れる。唇が離れた瞬間、ポツと顔が熱くなった。

「な？」

「なんの確認？ なんの確認ですかっ!? 顔どころか耳まで熱くて、顔なんかきつと真っ赤だけど下を向くことも目をそらすこともできない。」

指先が頬に触れているから、ではなく、雅貴さんの視線が脅迫的なほど熱っぽくて、そらしちゃ

いけないっていう気にさせられる。

恥ずかしいからそらしたい……でも、この雅貴さんを見ないのはもったいなさすぎる!!
暴力です! これは色気の暴力ですよ!!

「わ……わっ、わかりましたあつ。じゃあ、出席してくれる友だちには、成人式並みに着飾ってきてくれてお願いでございますっ!」

ドキドキすぎて心臓が口から飛び出しそうだ。そのせいか少々つかえつつ、わたしはなんとか言葉返す。大人の色気というものに白旗状態のわたしを知ってか知らずか、雅貴さんはにっこりと微笑んだ。

「それは華やかでいいな。悪い大人が近寄っていかないよう、監視役を立てておかなくてはならないかも」

それは助かるかも。女友だちのことを考えれば嬉しい配慮だと思う。

雅貴さんの提案に、わたしは笑顔でうなずいた。友だちのためにも、こういうところはしつかり頼んでおかなくちゃ!

そうしてわたしは、再びプチフルのケースに手を伸ばす。

「あつ、レアチーズが二種類ありますよ。雅貴さん好きでしょ? どっちにします?」

顔を向けると、雅貴さんがなにかを考えこむみたいに眉を寄せている。

……どっちにしようか悩んでいるのかな。雅貴さん、レアチーズケーキ好きだもんね。

両方雅貴さんが食べてもいいのに。

やがて、彼はわたしを見てにっこりと微笑んだ。

「成人式の日、式典が終わったら二人きりでお祝いをしないか。せっかくの晴れの日だし、その日は俺にエスコートさせてくれ」

二人きりでお祝いという言葉にときめいたわたしは、二つ返事で了承し、レアチーズケーキを二つとも雅貴さんに渡したのだった。

成人式当日。

わたしは母の行きつけの美容室に、着付けと一緒にメイクとヘアセットの予約を入れていた。しかし雅貴さんの勧めもあり、それらを西園寺家でしてもらうことになった。

わざわざ自宅まで迎えに来てくれた雅貴さんに連れられ、わたしは久しぶりに西園寺家を訪れる。「いらっしやーい、愛衣ちゃんっ。もおー、相変わらずかわいいわねえ」

何度来ても恐縮してしまうくらい立派な西園寺家の玄関でわたしを迎えてくれたのは、雅貴さんのお母さんだった。

今までは「貴和子さん」と呼んでいたのだけど、これからは「お義母さん」と呼んだほうがいいのかな。

「こ、こんにちは、貴和子さ……あ、お、お義母さん。あの、今日はお世話になります」

少々照れ臭く感じつつ頭を下げると、いきなり貴和子さんにぎゅむっと抱きしめられた。

「かわいいわあ。でも、なんだか硬いわねえ。呼びづらかったら今までどおりでいいのよ？ 愛衣ちゃんに緊張されると私も寂しいわ」

「はっ、はい、すみませ……」

二十歳で雅貴さんを産んだ貴和子さんは、すごく綺麗な人だ。アラフィフとは思えないほどスタイルがよく、白くて張りのあるお肌をしていらつしやる。

……ちよつと、羨ましいくらいだ。きつと、こういう人のことを世間では、美魔女びまじょというに違いない。

抱きしめられたまま、ボリユームのある胸の谷間に顔を押しつけられていたわたしは、溜息とともにそこから引き剥はがされた。

「お母さん、駄目ですよ。愛衣は俺のです」

すぐ後ろにいた雅貴さんに肩を抱き寄せられる。貴和子さんの前でくつついていることにも照れるが、彼のセリフにも照れてしまった。

「いいじゃない。私の娘よ？」

「俺の、妻です。愛衣はお母さんのオモチャじゃないんですからね」

「もー、ケチねえ」

「いまだかつて、従業員にだってケチと言われた覚えはありませんよ」

二人のやり取りに、笑いたいのをグツとこらえる。だって、雅貴さんがすごく真面目な顔で言い返しているのがおかしいんだもん。

「式典は午後一時半からなので、軽く昼食をとってから始めましょう。お母さん、お願いしていた件は？」

「大丈夫よ。みんなばっちり待機しているわ」

「わかりました」

二人でなにかを打ち合わせ、雅貴さんはわたしの肩をポンツと軽く叩いた。

「行こう。少し早いけど、まずは昼食だ」

「あ、はい。……でも、あまり食欲がないんですが」

「緊張しているのかな。そんなに長い式典ではないが、食事はしておいたほうがいい。食べられるだけでいいから」

「はい、そうします」

わたしが素直に返事をして笑いかけると、雅貴さんも満足げに微笑み返してくれる。それが嬉しいというか、照れるというか、くすぐりたい。

「じゃあ、あとでね、愛衣ちゃん。楽しみだわあ、みんなに張り切ってもらわなくちゃっ」

意気揚々と広いエントランスホールを歩いていく貴和子さんを見送ってから、雅貴さんに目を向けた。

「あの、雅貴さん？ 張り切ってもらうみんな、つて……」

「愛衣の準備係だ。母さんお薦めのメイクアップアーティストやヘアデザイナー、スタイリスト、もろもろを揃えてもらった」

ええっ、なんですかそれ。

いつもお洒落な貴和子さんお薦めなんて、すごい人たちじゃないですか!?

「カメラマンも待機させている。今日のためにイタリアから呼び寄せた、新進気鋭のカメラマンらしい。この仕事が上手くいけば結婚式のときも契約することになっているから、張り切って仕事をしてくれるだろう」

イタリアって……さらに、すごいんですけど……

雅貴さん、というか西園寺家の人たちが、そういうすごいことを平気のできる人たちなんだって、わかっているようでわかっていなかったのかもしれない。

これから起こるらしい未知の体験を思い、わたしの緊張はいやでも高まってくる。

西院寺家のシェフ特製ランチは、半分も喉を通らなかった。

今日は朝から雲ひとつない晴天だ。

きつと新成人の晴れ男と晴れ女が、タッグを組んで頑張ったに違いない。

成人式の式典が行われる建物の前庭や駐車場には、新成人たちがたむろしてにぎわっていた。

そんな中、いきなり超高級リムジンが登場したのだから、周囲は一瞬にして静まり返った……ようだった。

なぜハッキリわからないかといえば、その車内に乗っていたのが雅貴さんとわたしだったからだ。着物やスーツに身を包んだ新成人、その親兄弟らしき人たちが、目を丸くしてわたしたちの乗る車を目で追ってくる。駐車場内なので速度もゆっくりのため、なんだか見世物になった気がして恥ずかしい。

そうだよね。こんなところに、いきなりVIPが乗るような高級外車が現れたら、そりゃあ誰だっけ見るよね。

わたしは窓から目をそらし、チラリと隣に座る雅貴さんを見る。すぐに目が合つてにこりと微笑まれ、そのカッコよさに思わずドキリとして下を向いてしまった。

すると、膝に置いていた手を横からキュッと握られて、またもやドキッとす。

「どうした？ 緊張しているのか？」

「緊張……もしますけど……。なんか、すごく注目を浴びているみたいで……」

「ああ、珍しいことじゃない。気にしなくてもいい」

しますよっ！

そりゃあ、雅貴さんは注目を浴びることなんて慣れてるんでしょうけど。

わたしは、ごくごく平凡な女子大生なんです！

そうこうしているうちに、車は会場の入り口に近い通路に停まる。エンジンが止まると同時に、運転手さんとボディガードの男性が先に降り、運転手さんが恭しく後部座席のドアを開けてくれた。まずは雅貴さんが降りる。着物の裾を気にしつつわたしがお尻をずらして降りる準備をしていると、スーツ姿の男性二人が会館のほうから小走りでやってくるのが見えた。

「西園寺社長、お待ちしてりました」

男性二人のうち、三つ揃えのスーツを着た初老の男性がにこやかに声をかける。わたしに手を差し出そうとしていた雅貴さんの視線が、そちらに向いた。

「おや、お待ちせしてしまいましたか？ まだ約束の時間まで一分ありますよ」

すっごい笑顔だけど、それは意地悪ではないんですか？ 雅貴さん。

焦って相手の男性に目を向ける。男性は取り繕うようにネクタイをグツと締め直し、喉を鳴らした。

「こ、これは失礼しました。いつ社長がいらっしやるかと楽しみにしておりましたもので。新年会以来ですわね」

「ええ。その節は最後までおつきあいできず失礼いたしました」

「とんでもありません。西園寺社長にご出席いただけただけで光栄でしたよ」

年齢だけを考えるなら、二人は親子ほど差があるんじゃないだろうか。なのに、初老の男性のほうが終始低姿勢だ。

……なんだろう、この人どこかで見たことがあるような気がするんだけど。

車から出られずにいるわたしの前に、雅貴さんの手が差し出される。ありがたく彼の手に掴まり車を降りると、どこかから「あつ、愛衣!」と、素っ頓狂な声が聞こえた。

咄嗟に声のしたほうへ目を向けると、同じ大学の友だち数人が驚いた顔でこつちを指さしている。そりゃあ、わたしがこんなすっごい車から出てきたら驚くよね……。わたしは苦笑いしかできないまま目をそらす。

「こちらが、社長が言っついていらした方ですわね」

男性がわたしに笑いかけ、確認するように雅貴さんを見る。雅貴さんはゆっくりとうなずいて、わたしの背に手を添えた。

「席のほうは？」

「はい、ホールのボックス席をご用意しております。専用の入り口からお入りください」

「ありがとうございます。市長」

危うく変な声が出そうになった……。なんとか声はこらえたものの、目が真ん丸になってしまふ。どっかで見たことがあるはずだよ！

この男の人、市長だ!!

こんな大層なお出迎えもそうだけど、席つてなに!? ホールのボックス席つて!? わたし、普通の座席で式典に参加するんじゃないの? 聞いてないんですけど!

驚きのあまり立ち止まってしまいそうなたしの背を押し、雅貴さんは会場の中へ足を進める。ボディガードさんが後ろからついてくるんだけど、進行方向にはたくさんの警備員さんが立っていて、誰一人としてわたしたちに近寄ってこられない状態になっていた。

す……す……す……

なんだか重要人物になった気分というか、どつかの国のお姫様みたいな扱いじゃないですか。

……そうとも思わなきゃ、頭が混乱しておかしくなってしまうそうさ。こんな普通ではない扱いを受けて、緊張しないわけがないじゃない……

ただでさえ着物で歩きづらいののに、なんだか足が震えてきた。雅貴さんが手を添えてくれていなきゃ、きつと転んでしまっている。

ま、まさかこんなことになるなんて……。わたしの感覚では想像もつかなかった世界だ……

中へ入るとロビーも新成人で溢れ返っていた。けれど、わたしたちの前には警備員さんたちがずらつと壁になって立つてくれていて、専用通路のように移動がスムーズだ。

式典の行われるホールは一階だけど、なぜかわたしたちは二階へ案内される。雅貴さんに促されるまま、ふかふかと踏み心地のいい絨毯を踏みしめ階段を上がり始めると、小さく名前を呼ばれた。

見ると「気づいて！」とばかりに手を振る大学の友だちの姿が目に入る。

思わず足を止めると、それに気づいた雅貴さんも足を止めた。

「友だちかい？」

「はい、大学の……。あの、ちょっとだけ話をしてきてもいいですか？」

雅貴さんは無言で友だちのほうを見ていたが、すぐにわたしを見て微笑み、快くうなずいてくれた。

「女の子ばかりか……いいよ、行っておいで。でも、式典開始の時間が近いから、あまり話しこまないようにするんだよ？」

「はい、わかりました。結婚式のことも伝えてきます」

そう言うと、雅貴さんの顔がさらににこやかになる。わたしは彼から離れ、友だちのところへ向かった。

動きを察した警備員さんが、下で手を振っていた友だち三人を近くまで誘導してくれる。周囲の注目を集める中で話をするというのもおかしな気分だが、せっかくの日に直接言葉を交わせないよりはいい。

「な……なんか、すごいことになってるけど、……事情は聞かないほうがいい感じ？」

三人を代表するように、仲の良い碧が声を潜めて聞いてくる。他の二人も、神秘的な表情で「うんうん」とうなずいていた。

「ごめんね。なんだかゆっくり話せない感じで。あの……一緒に来た男の人に送り迎えをしてもらうことになってただけど、まさかこんなことになるとは夢にも思わなくて……」

「あの男の人、見るからにただ者じゃないって感じだけど……大丈夫？」

さらに声を潜めた碧たちに、心配そうな目を向けられる。

無理もない……。確かに雅貴さんは、ただ者じゃないオーラが漂っている人だしね。それに庶民オーラ全開のわたしが高級リムジンなんかで現れて、市長のお出迎えを受けたあげく、この警備員さん総出の厳戒態勢だもんね。

驚かないわけがないし、心配しないわけでもない。

事情を説明しても信じてもらえないかもしれないけど、説明しないわけにもいかない。結婚式に招待する都合だつてあるんだから。

「うん……。あの、わたしね、あの男の人と来月結婚することになったんだ……。お、幼なじみなんだけどね。実はあの人、大きいホテルチェーンの社長で……。そのせいか、なぜかわたしがこんな扱いに……」

いろいろ省いた説明ではあったが、必要なことは伝わったらしい。三人は同時に目を大きくし、次の瞬間、碧がガシツとわたしの両肩を掴む。他の二人もググツと詰め寄ってきた。

こんな状況でなければ、きっと驚きとも喜びともつかない歓声が辺りに響いていたに違いない。

しかし、いかなせんこの状態では、それをやるのははばかられる。

三人は笑うのを必死にこらえたような顔でうなずく。碧にいたっては、わたしの肩を興奮して何度も叩いた。

「す……。すぐいろいろ聞きたいんだけど、でも……。どうしよう……。あつ、そうだ、愛衣さ、

式典が終わったあとの集まりに来られる？」

さつきまで周囲を気遣って小さかった碧の声は、興奮で少々大きくなっていた。

「聞いてみないとわからないけど、少しくらいは顔を出したいな」

「待ってる。来られたらおいでよ」

「ごめんね、ゆっくり話ができなくて」

「いいよ、いいよ。もし来られなくても、お姫様みただったねー、って愛衣をネタにみんなで盛り上がるから」

「お……。お姫様って……」

「ほら、王子様が待つてるから早く行きなよ。なんか、このまま愛衣を引き留め続けてたら手打ちにされそう」

手打ち……。は、王子様はしないような気がするけど。

苦笑しながら手を振って三人と別れ、雅貴さんのところへ戻る。彼は終始柔らかな微笑みでわたしを見ていた。

急いで戻る……。つもりが、着慣れない着物のせいで上手く歩けない。裾が狭いので歩幅が小さく、階段を上るのも一苦勞だ。

それを察したのか、雅貴さんが階段を下りてくる。そして迎えに来たよと言わんばかりにわたしの手を取り、一緒に階段を上り始めた。

「すみません、お待たせして。あの、報告、してきました」

「式のあとに、みんなで集まる予定があったのかい？」

「どうやら先ほどの会話は雅貴さんにも聞こえていたらしい。興奮した碧の声が大きくなっていて、ので当然かもしれないが。」

「はい。みんなで乾杯して近況を話すくらいの集まりですけど」

一人だったら出席してもいいかなと思っていた。

ただ、式典が終わったら二人でお祝いをしようって言われている。もちろんそちらを優先するつもりだけど、ほんの少しだけ顔を出せないだろうか。わたしはおそるおそる聞いてみた。

「あの……、少しだけ、顔を出してきてもいいですか？『久しぶり』って、ちょっと挨拶あいさつしてくる程度に……」

「さっきの友だちみたいな子ばかりが来るのか？」

「大学と高校の友だち、かな？」

「場所は？」

「この先のビルに入っているピザ専門店です。一階は普通席だけど、二階にパーティールームがあって、まとまった人数で予約ができるんです」

「そうか。若者っぽくていいな。俺も大学生のときは、仲間と夜中まで居酒屋で飲んでいたこともあったっけ。……懐なつかしいな。今はもう、そんなこともできないけれど」

「ちょっとはにかんだ笑みを浮かべる雅貴さん。それを見た瞬間、息が詰まって胸の奥が熱くなった。」

「うわぁ……雅貴さん、かわいいっ！」

「いや、かつこいいい!!」

「かわいくてかつこいいって、なんなの!?! ちょっと、反則ですよ! 不意打ちでそんな笑顔見せちゃいけません!!」

——音を立てて胸を撃ち抜かれた。

「どうしよう……胸むねが……すぐドキドキしてる。きゅんとする以上の衝撃って、なんて表現したらいいの!?!」

「雅貴さんは、本当に素敵すてきな人だ……」

「わかりきっていることだけど、それを確認するたびに嬉しくなる。わたしは本当に、こんな素敵すてきな人のお嫁さんになれるんだ。」

「ふわふわした気持ちで歩いていくと、警備員さんがドアを開けてくれる。そこはバルコニーみたいになっていて、上から会場内を見渡せた。座り心地のよさそうな大きい椅子が二つ並んでいる。」

「すごいVIP待遇だ。これって、間違いなく雅貴さん効果だよな。」

「わたしの手を引いて、雅貴さんが椅子うゑがに促してくれる。着物の前合わせが崩れないように意識してそっと座ると、彼がわたしに覆おほいかぶさるみたいに上体をかがめた。」

「愛衣」

「はい？」

何気なく返事をした次の瞬間、雅貴さんの唇がチュッとわたしの唇に触れる。

一瞬の間をおいて慌てだす思考。汗が噴き出そうなほど顔が熱くなって、動揺のあまりお尻をもぞもぞ動かしてしまった。

「ここで、いきなり、びっくりですよ、雅貴さんっ!」

「集まり、行っておいで」

「え? ……いいんですか?」

雅貴さんの言葉に、思わずわたしは上擦った声を出してしまった。

「実は、式典のあと、少し仕事で顔を出さなくてはいけない場所があるんだ。そのあいだ、愛衣には車で待っていてもらおうと思っていたんだが、それなら友だちに会ってきたいだろう?」

「雅貴さん……」

「用事が終わったら迎えに行く。三十分くらいだが、それでもいいかな?」

「はい。ありがとうございます」

弾んだ声でお礼を言うと、微笑んだ雅貴さんに、頭をポンポンされた。

雅貴さん優しい。ほんつと優しい! 大好き!

嬉しくなったわたしは、ちよつと身を乗り出して彼に顔を近づけた。

「雅貴さんっ」

「ん?」

「お礼です」

高速で彼の頬にキスをして、パッと離れる。こんな大胆なことをするのは初めてだ。

自分でしておきながら、じわじわと恥ずかしくなってくる。

驚いたみたいになちよつと目を見開いた雅貴さんは、すぐにふつと柔らかく微笑んだ。

「どうしよう。嬉しくて、今すぐ愛衣を抱きしめたいな」

「それは……今は……あの……」

いくらボックス席とはいえ、後ろにはボディガードの人が立っているし、警備員さんもいる。さらに、一階からは物珍しげに見上げてくる人たちもいた。

すると、隣の席に座った雅貴さんが顔を近づけてきて、耳元でこそりと囁く。

「あとで、二人きりになったら、ぎゅっ、て抱きしめていいか?」

そんなこと言われたらドキドキしてしまう……。胸が苦しいのは、きっと帯がきついからだけじゃない。

恥ずかしいけど、この羞恥心というものがまた幸せで……

「……はっ」

小声で返事をしたとき、式典の開始がアナウンスされた。

式典後、お仕事に行くという雅貴さんと別れて、歩いてみんなの集まるお店に行くつもりだった。そんなに遠くないし、歩いても十分くらいだ。
しかし……

「着慣れない着物で十分も歩かせるわけないだろう。足が痛くなったらどうする」

と雅貴さんに力説されて、仕事に向かうついでに車で送ってもらうことになったのである。それにしても雅貴さん、心配性だなあ。

でも、心配されるのが気持ちいいというか、嬉しいというか、変な気分。

車で送ってもらったとはいえ、わたしの到着は開始時刻から三十分以上遅れてしまった。

雅貴さんの用事に合わせて会場を出たというのもあるが、式典終了後、挨拶^{あいさつ}に来た市長と話したり、駐車場の混雑を避けたりしていたからだ。

パーティールームになっているピザ専門店の二階は、階段を上がってすぐにフロアが広がっている。階段の途中から、にぎやかな声が聞こえてきた。

「あーっ、愛衣っ！ よく来られたね！」

着物の裾を気にしつつ階段を上りきったわたしを最初に見つけたのは碧だった。

「うん。三十分くらいだけど行っってきていいよ、って」

「おー、王子優しいじゃない」

碧に手招きされて、彼女のいるテーブルへ向かう。すると、同じテーブルのみならず、隣のテーブルの女の子までもが一齐に声をかけてきた。

「びっくりしたよ、結婚するって!？」

「で？ あの王子様は誰なの!？」

「めちゃくちゃイイ男じゃない！ それに、イトコの社長さんなんだって!？」

「なに？ 玉の輿^{こし}？ なにそれ、いつの間に!？」

「あー、でもでも、なんかわかんないけど、おめでどう!？」

「そうだ、おめでどう、愛衣!？」

「おめでとー!!」

相手のことを根掘り葉掘り……の雰囲気から一転、急に祝福ムードが盛り上がる。

わたしの結婚話をネタに……と碧が言っていたことを思い出す。きつと、すでに結婚についての話がされていたのだろう。他のテーブルからも「おめでどう」の声が聞こえてきた。

「あ、ありがとう」

照れつつみんなにお礼を言うと、碧が浮かれた調子でわたしの肩をポンポンと叩いた。

「まさか、愛衣が一番最初に結婚するなんてね。しかも、あんな王子様みたいな相手となんて、羨ましいっ」

「そうだよ。もう、ひたすらビックリした」

「一番男つ気がなかったくせにねえ」

そう言われると返す言葉もない。でも、幼なじみですと家庭教師をしてくれていた雅貴さんが、いつもそばにいたんだから、まったく男つ気がなかったわけじゃないと思う。

まあ、雅貴さんが近くにいることで、彼氏が欲しいと思ったこともなければ、他の男の子に目がいくこともなかったのは確かだけだ。

「マジかあ。一回くらいデートしてもらってあげばよかったあ」

「とにかく、乾杯、乾杯」

他のテーブルから、同じゼミの男子が駆け寄ってくる。空のグラスを渡されて、綺麗な色の炭酸を注がれた。

なんだろう。見るからにビールではないけど。

くんくんと匂いを嗅ぐと、甘い香りがした。

ジュースかな？ それにしては、カッコつけた瓶だったような気がするけど。

そんなことを考えているうちに、周囲はすっかり乾杯ムードになっていた。

「愛衣、結婚おめでとう！」

碧の声に続いて、重なる「おめでとう」の声と「乾杯！」の音頭。わたしは、次々とやってくるみんなと乾杯しつつ、グラスに口をつけた。

あ……、甘くて美味しい。

すぐ飲みやすくて一気に半分近く飲んでしまった。すぐに、追加を注がれる。

「でもさあ、冬休み前までそんな話、一言もしてなかったでしょう？ いつ結婚が決まったの？」

「それ聞きたいっ。プロポーズとかってあったんだよね。いつ？」

「つていうかさ、結婚相手ってなにやってる人？」

矢継ぎ早に飛んでくる質問は、やっぱり結婚についてだ。そりゃあ聞かれるだろうとは思っていたけれど、なにか話したらいいものか。

グラスに口をつけながら、周囲を窺う。親しい人たちは興味津々でテーブルに集まっているけれど、その他の人たちは自分のテーブルでお喋りを始めていた。

誰かときあつた経験なんてないから、自分の特別な相手の話をするなんて初めてだ。なんて照れくさいんだろう。

緊張して渴いてくる口の中を甘い炭酸で潤しつつ、わたしは碧に顔を向けて話した。

「ほら、幼なじみに家庭教師してもらっているって話したことがあるでしょう？ その人なんだ」

「愛衣の家庭教師をしてくれてる人って……。スッゴク年が離れてなかった？」

「スッゴク……って。それほどじゃないよ。十歳だもん」

「スッゴクじゃない」

「そうかな？」

そうなんだろうか。ずっと雅貴さんが当然のようにそばにいるから、感覚がマヒしているのかも
しない。

「でも、もっとすごいのは、あんな大人の男の人にプロポーズされたってことだよ。いつ言われ
たの？ やっぱり『結婚しよう』って？」

碧が「結婚しよう」のところが男性っぽく声を変えて言った。

周囲が笑い声を上げるので、わたしもつい笑ってしまっただけで、気持ちが悪くない。グラスが空になると、
「まあ、どーぞどーぞ」と新しく注がれた。

「誕生日の日に。その、彼と一緒にご飯に行っただけで、まさかわたしもプロポーズされるとは
思ってた……」

「誕生日か。なんか、記念日を狙いました、って感じ」

「そう、なのかも。だって、雪の中のイルミネーションが綺麗だね。あんな中で言われたら、気持
ちもふわふわするって」

「雪の中のイルミネーション？」

「うん」

「愛衣の誕生日ってクリスマス・イブだよ？ その日に、雪なんか降ったっけ？」

「え？」

「違う日にお祝いしたの？ あれ……でも、雪か。年末に降った日なんてあったっけ？」

不思議そうにする碧を見ながら、わたしのほうが不思議になる。

プロポーズをされたのは、間違いなくわたしの誕生日、クリスマス・イブだ。あのとき、イルミ
ネーションの光を反射して雪がキラキラ輝いていた。それがすごく綺麗だったから、今もすっかり
と目に焼き付いている。

もしかして、あの場所にだけ降ったのだろうか。雨だって、ときどき一部の地域にだけ降ったり
する。あのときの雪も、それと同じだったのかもしれない。

そんなことを考えていると、いつの間にかグラスが満杯にされる。話しながら飲んでいたので、
もう誰が注いでくれたのかわからない。

「クリスマス・イブのイルミネーションといえば、駅前公園が一定時間立ち入り禁止になってたの
知ってる？」

碧の横に立っていた女子が思い出したみたいに口を開く。「なにそれ」と碧が反応すると、他の
子も「あ、知ってる」と声を上げた。

「クリスマス・イブの夜八時過ぎごろらしいけど、駅前公園の一角が立ち入り禁止になったんだっ
て。それで、スキー場で見ると、大きな降雪機が運ばれてきたり、イベント表に記載のない花火
が上がったり……。なんかのドラマの撮影でもあったんじゃないかって話だったけど……」

「へーえ、大掛かりだね。それにしても、わざわざクリスマス・イブにやる？ 他の日にした
らいいのに」

「そうだよね。イルミネーションが綺麗だから、あそこをデートコースに入れていたカップルもいたんじゃない？ びつくりしただろうね」

「でも冬に花火なんか上がったら、それだけでカップルのお手伝いになったかも」

笑い声が上がる中、わたしは嫌な汗が出てくるのを感じた。

時間といい、内容といい、あの日のことに間違いはない……

でも、立ち入り禁止って、どういうこと？

あのとき、公園内に人がいないとは思っていた。

もしかしくなくとも、わたしたちがいたのは、その立ち入り禁止区域内ということ？ 雅貴さんは、

それを知っていて、わたしをあの場合へ連れて行ったのだろうか。

……冷静に考えれば、確かにおかしいのだ。

クリスマス・イブのあの時間に、あんなに人通りの多い場所に人がいないはずがない。

あの夢のようなシチュエーションは、もしかして雅貴さんがわたしへのプロポーズのためにあ

かじめ仕組んでいたもの……？

考えれば考えるほど冷や汗が出てくる。

こんなこと、言えるわけがない……

あの日の立ち入り禁止の理由。降雪機の謎や、冬に上がった花火。

——それをした人間が、わたしの結婚相手かもしれないなんて。

なんだか混乱してきて頭がクラクラする。目の前がぼやけて、熱いような冷たいような汗が流れ

てきた。

グラスに入った冷たい液体を喉にとおすものの、ちっとも味がわからない。

「愛衣？ どうしたの？」

わたしの様子がおかしいことに気づいたのか、碧が手を伸ばしてくる。でも、それが届く前にわた

しの手からグラスが落ちた。

「愛衣!？」

ぐらぐらして、とても目を開けていられない。

急に視界が暗くなったと思った瞬間、世界が回って……

——目を覚ましたとき、自分がどこにいるのかわからなかった。

ふわふわしているので、おそらくお蒲団ふとんの上……かもしれない。

ただ、目に映ったのが見たこともない天井、いや、布……というか装飾品……？

なんだ、これ？

「気分はどうだ？ 愛衣」

耳に入ってきたのは雅貴さんの声。そして、心配そうにわたしを覗のぞきこんでくる彼の顔が見えた。